

## 「まかね」考

著者	廣岡 義隆
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	15
ページ	13-30
発行年	2004-06-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6606">http://hdl.handle.net/10076/6606</a>

# 「まかね」考

廣岡義隆

## ○キーワード――

まかね、にふ、まそほ、こがね、古今伝授……………主要五項  
まかねふく、辰砂、枕詞、言語遊戲、吉備の中山……………二次五項

## 一、はじめに

『萬葉集』東歌の中に「麻可祢布久 尔布」の表現がある。  
この「麻可祢」の実態は何であり、また「麻可祢布久」とはどのような意味になるのか。そしてそれがどういう経緯で「尔布」に冠すのかということについて、考究する。

その東歌は、いわゆる「未勘国歌」中の一首としての次のAの歌である。

A 麻可祢布久 尔布能麻曾保乃 伊吕尔侶豆 伊波奈久能  
未曾 安我古布良久波 (14・三五六Q、東歌)

この「麻可祢」の語について、一九九一～二年頃に、当時三重大学教育学部教授であった松山鉄夫先生（日本美術史学、現大東文化大学教授）から、『萬葉集』ではどのような解釈になっていた

のかという質問を受け、諸説をまとめて提示したことがあった。以来、気になっている事項である。

一九九六年度の講義の中で、『能因歌枕』（京都女子大学図書館蔵、吉澤文庫本）を読み進めたところ、「まかねふくとはくらかねをふくをいふ」（七丁表七行目）という記述を眼にし、その鉄説に違和感を覚えるにいたり、いささか調べ、当時関わっていた『日本国語大辞典』（第二版、小学館）の語誌項目執筆の関係から、同編集部へプリント二枚の資料を提出し、初版の「まかね」の辞書項目を改めるのがよいと、その語義項目改訂に関する提言をした（一九九七年一月）。そうしたところ、折り返し、同年夏休み明けにでも「まかね」に関する語誌項目を執筆しないかという好意的な返答を戴いた。しかしながら、当時、新編日本古典文学全集『風土記』の「逸文」の部に没頭していて、その余裕はなく（同書は同年一〇月刊行）、かつは『古今和歌集』に見られる「まかねふく吉備の中山」（二〇八二番歌）についての解釈の見通しが全く付いていないこともあって「保留」と返答し、提出資料を自由に活用して語義記述をして載いてよい旨を書き送っ

た(同年二月)。同年五月末になって『風土記』の件が一段落したので、今からでも「まかね」の語義記述改訂案を送ってもよいかと尋ね、まず最初は「まかね」と「まかねふく」の語義項目の改訂案のみを送稿したように記憶している。ついでその語誌も求められ、同語誌項目を送付したのではなかったかと思う(同年七月提出)。

他の所与の語誌項目の執筆に関しては、送付原稿と完成した第二版とを見較べると、大斧が振るわれていて、苦心して書いた原稿が改変されたり、極端な場合は跡形もなくなっているというところもあり、その編集作業は実質的な大作業であつたようである。しかしながら、この「まかね」に関しては、ほぼ原姿が保たれている。まずは、その過程をここに略述しておこう。

B 初版(一九七五年二月)の辞書項目(抜粋、用例略)(注1)  
まがね ①(古くは「まかね」)鉄。くろがね。②(真

金)純粹の黄金。純金。しんきん。

まかねふく 曰囀(「真金」は鉄。「吹く」は、製鍊の際、  
踏轆(たたら)とよばれる大きなふくごで空気を吹く  
ことで、鉄を製する意) ①「丹生(にぶ)」にかか  
る。「丹生」は砂鉄などを含む赤土。②地名「吉備」  
にかかる。吉備が鉄の産地であるため。 曰雅楽の曲  
名。催馬楽(さいばら)、呂の歌の中にあつたが曲は絶  
えた。

C 提出した素稿(一九九七年七月)(抜粋、用例一部略)(注2)  
まかね ①(真金、古くは「まかね」)純粹の黄金。純金。

しんきん。\*源信往生要集「第三身相神通樂者、彼土  
衆生、其身真金色、内外俱清淨、常有光明、彼此互照、  
三十二相、具足莊嚴」\*名義抄「鉿 金、カネ、マカ  
ネ、コガネ」\*藤坊堯恵古今集聞書(六卷抄)「マカネ  
トハコカネライヘト、クロカネヲモアラカネニ対ヘテ  
イフヘキ歟」\*日葡辞書「Magana(マガネ) 訳 黄金。  
歌語」 ②鉄。くろがね。

語誌 「まかね」の「ま」は完美的、完きの意の接頭語  
で、「片」に対応するもの。『万葉集』や『古今集』の  
古い例には「まかねふく」の枕詞形で見られる。『万葉  
集』東歌三美の例は「丹生」にかかる「まかねふく」  
として出る。これは当時盛んであつた造仏(大仏等)の  
際に、仏像への鍍金(葺く)の過程で金を水銀によって  
液状化して用いたところから(アマルガム法、水銀の産  
地である丹生(松田壽男『丹生の研究』)に掛ける枕詞の  
用法として出てきたものであり、この「まかね」は黄  
金をいう意味である。これが「まかね」の本義である。  
『往生要集』の例も仏の三十二相中の「全身金色相」  
を示して「その身、真金色」としている。鉄とする解  
釈は、古今集の歌「まがねふく吉備の中山」(二八三)の  
理解から出てきたものと考えられる。吉備国が著名な  
鉄の産地(久米郡久米町の大蔵池遺跡、他)であつたところ  
から、「まかね」が鉄と理解されたもので、これは古  
今伝授の中で伝えられていった。「マカネフクトハ鉄

ヲ掘出シテタ、ラニテ吹涌（ふきわかし）テ常ノ鉄ニナ  
スヲ云也。是ハ備中ニ鉄ノ多（おほき）所ナレハキヒノ  
中山トイハン枕詞ニ置リ」〔口伝〕曼殊院藏古今伝授資料』  
所収。古今伝授においてはどの本も「鉄」として伝え  
ており、この古今伝授の歌学は後世の歌の流れに大き  
く影響していった。このようにして「まかね」に鉄の  
意が付け加わつていった。

まかねふく 曰 囀（真金）は黄金。「葺く」は、鍍金すること。  
と。水銀によるアマルガム法で鍍金したことから出てきた枕  
詞 ①「丹生（にぶ）」の「丹」にかかる。「丹」は辰  
砂（硫化水銀）を含む岩や水銀そのものを言い、その岩  
を産する地名を「丹生」という。②地名「吉備」に  
かかる。かかり方の詳細は不明であるが、或いは讃詞  
（ほめことば）としての「まかね（黄金）ふく」（「ふく」  
は産する意）から「吉備」に掛けられのではないかと考  
えられる。また一案として黄金色のキビ（黍）と関連  
させての枕詞修飾用法かとも考えられる。古今伝授の  
世界において「まがね（鉄）のタタラを吹く」の意で  
理解されて行つた。 曰 雅楽の曲名。

D 第二版（二〇〇一年二月）の辞書項目（抜粋、用例略）（注3）

まがね（古くは「まかね」）①（真金）純粹の黄金。  
純金。しんきん。②鉄。くろがね。

語註 ①「ま」は完美な、まったきの意の接頭語。「万葉  
集」や「古今集」に見られる例には「まかねふく」の

枕詞の形で見られる。同項の挙例「万葉・一四・三五六  
〇」は当時盛んであった造仏（大仏等）の際に、仏像へ  
の鍍金（葺く）の過程で金を水銀によって液化して用  
いたアマルガム法とことから、水銀の産地である丹  
生にかける枕詞の用法として出てきたものであり、こ  
の「まかね」は黄金をいう。②鉄とする解釈は、「ま  
かねふく②」の挙例「古今神あそびの歌・一〇八二」  
の理解から出たものと思われる。吉備国が著名な鉄の  
産地（久米郡久米町の大蔵池遺跡、他）であったこと  
ろから、「まかね」が鉄と理解され、古今伝授の中で伝  
えられていった。「まかねふく」と云は、土の中なるくろ  
金を水にてゆりあつめて、たたらと云物にて吹わかす  
也。まかねとはこがねをいへど、くろかねをもあらか  
ねに對ていふべき歟」（「古今圖書六」）のように古今伝  
授においてはどの本も「鉄」として伝えており、後世  
の歌の流れに大きく影響した。

まかねふく 曰 囀（真金）は黄金。「葺く」は、  
鍍金（めつき）する意。①「丹生（にぶ）」にかかる。「丹」  
は辰砂（硫化水銀）を含む岩や水銀そのものを言い、そ  
の岩を産する地名を「丹生」という。②地名「吉備」  
にかかる。かかり方の詳細は不明。↓補注。 曰 雅楽  
の曲名。補注（曰②について）「まかね」は黄金の意  
で、讃詞か。または黄金色のキビ（黍）から、「吉備」に  
かかるか。↓「まがね（真金）」の語註。

その後、放置して今に至っている。このことについて再考し、書き留めておいた方がよいと考え、当時の資料を基に、この小文を記すものである。

## 二、近代の辞書記述の概要

まずは近代以降における辞書記述についての概要をここに記しておこう。網羅することが目的ではなく、その代表的なものを挙げることで、趨勢を見るものである。品詞表示は略し、その用例も略して「…」で示した。

E まがね 鐵。くろがね。てつ。古語。

F まがね 眞金 鐵。くろがね。釧アサギ。  
（落合直文氏『日本大辭典 ことはの泉』一九九年（明治31））

まがね ふく 吹眞金 鐵鑛を鑄て吹き分く。萬マン。「…」  
古今大歌「…」

G まがね 眞金（鑛鐵ニ對シテ云フ語ト）クロガネ。鐵。  
（上田萬年氏・松井簡治氏『大日本國語辭典』一九九年（大正8））  
和泉式部續集「…」永久四年百首、夏衣「…」

まがね ふく （枕）眞金吹「まがねハ鐵ナリ、其地ニテ、  
鑛ニテ鐵ヲ、吹きワカチシナラム、備前ニハ、名アル  
刀工アリキ」 丹生、及、吉備ナドニ冠ラスル枕詞。  
萬葉集、十四三「…」古今集、廿、大歌「…」金葉集、一、春  
「…」

右二項（大槻文彦氏『大言海』二三年（昭和10））

H まかね【鉄】 鐵。マは形状言。「…」（万葉集）「…」（記

神代）「…」（播磨風土記采禾郡）【考】砂鉄から銑鉄を製することは、わが国でも古代から中国地方などで行なわれた。当時は地を掘った平炉（野炉といふ）で砂鉄を木炭と合わせ溶かして製鍊していたと推定されている。…下略…

まかねふく 枕詞。丹生、地名吉備にかか。フクは金屬を溶解・製鍊すること。丹生は砂鉄や辰砂を含む赤土であり、吉備（岡山県の一部）は鉄の産地であるためにかかるのである。「…」（万葉集）「…」（催馬楽眞金吹く）【考】丹生は、「丹生郷、昔時之人取此山沙、該朱沙」、因曰「丹生郷」（豊後風土記海部郡）とあり、近江伊香郡・伊勢飯南郡・上野甘楽郡などの丹生も製鉄の行なわれた地という。

右二項『時代別国語大辭典 上代編』二三年（昭和42）

右の『時代別国語大辭典 上代編』で、清音表示の「まかね」となったが、その語義は、ずっと「鉄」で貫かれている。これは後述する『古今和歌集』の歌の解釈が影を落しているものと言えよう。

I まかね【眞金】鉄のこと。

補注まかね 通説では「鉄」とするが、マカネは黄金をいう。従って「眞金吹く」とは「黄金を作る」という意なのである。すなわち、金を含有している鉱石に水銀を加えてよく混ぜると、金は水銀と反応して、金アマルガム

を作る。さらに加熱して水銀を蒸留すると、金が残る。これをマガネフクという。その水銀の原料である辰砂(田<sup>タ</sup>)の産地を丹生(ト)という。全国的に丹生の地名をもつ所が多い。…下略…

『新明解古語辞典 補注版』(一五年(昭和48))

\*翌年刊行の第二版も同内容。

高校生を主たる利用者と目している『新明解古語辞典』においては「鉄のこと」とあるのみであるが、金田一春彦氏を中心となつて刊行されたその補注版では、明確に「黄金」という解釈が提示された。しかし、その根拠は示されていない。ほぼ同時期に刊行された『岩波古語辞典』は、旧来の「鉄」という解になつてゐる。

J まかね【真金】(マは接頭語)鉄。「釦、マガネ」(名義抄)

「ふく【真金吹く】(枕詞)鉄を精錬する意から、鉄の精錬の行なわれた地名「丹生(ト)」「吉備(ト)」にかかる。

「…」(万三葉〇)。「…」(古今〇八三)。「…」(能因歌枕)

『岩波古語辞典』初版(五五年(昭和49)) \*補訂版も同内容。

「黄金」という言及が見られるのは、『日本国語大辞典』初版(五五年(昭和50))においてである前出。語義の①においては、「鉄。くろがね」としつつも、語義の②において、「純粹の黄金。

純金」とし、『日葡辞書』の「黄金」という動かね証例を提示している。

### 三、古今和歌集の歌の理解から

『古今和歌集』に「まかねふくきひ」の例がある。

K まかねふくきひのなかやまおひにせるほそたにかはのおとのさやけさ

このうたは承和のおほむへのきひのくにのうた

(高野切『古今和歌集』20・二〇三(注4))

この歌に関する近現代の代表的な注釈を瞥見して見ると次のようになる。

L まがねふく 「ま」は美稱。「かね」は廣く金屬をさしていふ。舊註は鐵なりといひ、契沖は黄金なりといつたが當らない。「ふく」は、鑛で鑛物を吹き分けるをいふ。「まがねふく」は吉備の枕詞に用ひてある。吉備の國には昔からおもに鐵を産する鑛山があつた。

(金子元臣氏『古今和歌集評釋』昭和新版、五三年(昭和28))

M まがねふく。「まがね」は、鑛。「ふく」は、鑛石を水でゆり集めた上、鑛でふき分けること。いにしへ吉備の國は鑛を産した所から、形容の意で「吉備」の枕詞となつたもの。【評】吉備の風俗歌である。一首は鑛を重んじてゐた時代とて、それを産する中山を、擬人といふよりは人格視してその關係から、細谷川の帶と見たのである。川水は、まがねをふくに用ゐるものであるから、山と川との關係は有機的なものである。「まがねふく」は枕詞ではあるが、それとして初期のもので、明かな意味を持ったものである。…

下略…。

(窪田空穂氏『古今和歌集評釋』一九七〇年(昭和42))

N 「釋」まがねふく「一句の枕詞。『まがね』は「あらがね」

に對し、吹き分けて精製した金屬をいふ。三備地方に鐵を發掘したと想はれる記事は、播磨風土記弘計王の御歌・日本靈異記下 將寫法花經建願人在暗穴内頼順力得全命縁・今昔一四ノ九等に散見する。

(三浦圭三氏『古今和歌集新講』二〇〇四年(昭和48))

O まがねふく「枕詞。鉄を吹き分ける意。吉備の国は古く鉄を産したのでこの枕詞がある。

(佐伯梅友氏『古今和歌集』)

日本古典文学大系本、一九六九年(昭和43)

P まかねふく 原義は鉄を溶かして分けること。吉備国は鉄を産したので、その枕詞となった。

(小沢正夫氏『古今和歌集』)

日本古典文学全集本、一九七〇年(昭和46)

Q まかねふく 「まかね」は「梅沢本」『訓点抄』その他の声点に従い、清音に読む。「ま」は接頭語、「かね」はここでは鉄。「取天金山之鉄」而「(古事記・神代)の例がある。」「ふく」は「金屬を溶解・精鍊すること。」(時代別大辞典)で、…下略…。

(竹岡正夫氏『古今和歌集全評釈』一九七〇年(昭和51))

R 黄金を産出するわたくしども吉備国の中山が、帯のように巡らせている細い谷川、その「細谷川」の水音の明るく澄みわたって清らかなことよ。○真金 本當の金屬、黄金

の意。中世注は「まかね」とも示す。○ふく 溶解・精鍊して金屬を取り出すことをいう。

(小島憲之氏・新井榮蔵氏『古今和歌集』)

新日本古典文学大系本、一九六九年(平成元年)

S まかねふく 原義は鉄を精鍊する意で、古代に鉄を産した吉備国の枕詞になった。

(小沢正夫氏・松田成穂氏『古今和歌集』)

新編日本古典文学全集本、一九七〇年(平成6)

T まかねふく「まかね」は「鉄」のこと。「天金山之鉄を取りて」(『古事記』神代・上)の例があり、『名義抄』では「釧」という字を「カネ」「マカネ」と読む。「ふく」は精鍊すること。ふいごなどで激しく風を吹きつけて鉋石を溶かして分けるから「吹く」と言ったのである。ここでは製鉄で有名な「吉備」の枕詞になっている。

(片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』一九七〇年(平成10))

新日本古典文学大系本『古今和歌集』では明確に「黄金」と解しているが、他は江戸期の北村季吟の『八代集抄』の次の解を出していないのである。

U まかねふくとは土中よりくろかねをほり出しあらかねを水にゆりあつめてたゝらにて吹わかすを真金吹といふ

(北村季吟『八代集抄』一六六三年)

この季吟の記述は「是迄頭註義」と断つており、『頭註密勘』に基づいた記述である。

さて、新日本古典文学大系本『古今和歌集』は「黄金」と踏

み込んでいるが、その前に『古今餘材抄』がある。

V 今案眞金は金をいふと知なから、くろかねと尺せられたるは、吉備の中山は鉄を出す所なりける歟。金をもとゝして、くろかねをまがねといはゞ白かねあかゝね、惣してあらかねにむかへてふけるかねをはいづれをも申へきなり。

(契沖『古今餘材抄』二五六年)

この契沖の言及は、その文中に「釈せられたるは」とあつて、『頭註密勘』に淵源しているのである。季吟の『八代集抄』も契沖の『古今餘材抄』も共に『頭註密勘』をベースにしながら展開していたのである。

W まかねふくとはつちのなかなるくろかねのあらかねを水にてゆりあつめてたゞらといふ物にてふきわかすなり。まかねとはこかねをいへとくろかねをもあらかねにむかへていふところ。

(六二丁ウ)

(日本古典文学影印叢刊22『頭註密勘』三三年。中央大学本)(注5) この『頭註密勘』や『古今餘材抄』は共に、「まかね」を黄金としながらも、鉄という解釈に傾いている。これは『頭註密勘』に続く『古今榮雅抄』(二四六年)も同様である。この「くろがね」という解釈は、実は古今伝授に端を発しているのである。

#### 四、古今伝授とその淵源

許された者以外には口外すべきでなく「可秘」とされた『古今和歌集』釈義の伝授は、本来文字に記録するものではない相

伝の奥義であつたが、「秘々密々無此上、不可有他見者也。穴

賢々々」(『玉伝深秘卷』)識語「更々不可許他見者也」(『古今鈔』)識語とされつつ書写を重ねていった。こうした古今伝授の中で

「まかね」はどのように扱われていたかを以下確認しておく。

X マカネトハ眞金也。クロカネ也。

(『古今秘注抄』二六〇)(注6)

識語に「先師定家以来相伝、分明也」とあるもので、ここに「鉄」と明示されている。

Y 黄金。眞金トカケルハ皆コカネ也。サレトモ是ハホルム詞也。クロカネニテアル歟。イ本云クロカネトハフカスタハラフク事也。

(『古今和歌集注抄出』二六〇)(注7)

右の「異本云」としてある中の「ト、フカス」は、恐らく「ト云事ハ」の誤写転訛であらうと見られる。さて、ここには黄金であると言明しながらも、伝授世界が影を落して「鉄」にあるか」とし、異本の「たたら吹く事也」を引いている。久保田淳氏の「解題」によると、為家の所説を記したもので、正応二年(二五〇)以降の成立とある。

Z まかねふくくろかねをいふ『古今秘聴抄』(二〇〇才)(注8)

識語に、「元徳三年(二三三)十月廿一日、依敕命之、難避盡相傳之秘奥、令書進之。輒不可被聽于外見者也。三代勅集作者元盛(花押)」とある書である。

a マカネフクト云ハ土ノ中ナルクロ金ヲ水ニテユリアツメテタハラト云物ニテ吹ワカス也。マカネトハコカネナイヘトクロカネヲモアラカネニ對テイフヘキ歟。



『古今集開書（六巻抄）』下冊三才（注9）

b まかねふくと云は土の中なるくろ金を水にてゆりあつめてたゝらと云物にて吹わかす也。まかねとはこかねをいへとくろかねをもあらかねに對ていふへき歟。

（飛鳥井雅章纂『古今和歌集開書』三丁ウ（注10）

「a」の書は、その跋文と識語により「延徳二年（翌〇）から明応七年（翌〇）までの八年間」の「堯恵から経厚への古今伝授」であることがわかり、「b」の書は、『六巻抄』（a）の一伝本である（浅見緑氏「解題」）。この「a・b」の文は、先に示した『頭註密勘』（W）と同文と言つてよい。『頭註密勘』は頭昭註に定家が付注した書であり、この文は頭註には存在しないので、明らかに定家の言及と見てよく、先に挙げた「X」「Z」の例はこの「a・b・W」の結論部分のみを記したものであり、「Y」は、父定家の口説（a・b・W）を子為家が自分流に記したものと知れよう。季吟の『八代集抄』（U）も「W」とほぼ同文といつてよい記述となつており、契沖の『古今餘材抄』（V）も「W」の理解の上で展開されていたのである。

c まかねふくとは鐵をふき合する事也。

『古今集開書』第三冊三才（注11）

d まかねふく 黒金をふき合する事也。

『難波津泰誼抄』下冊四才（注12）

e マカネフクト事也眞金吹ト云類ノマカネフクトハ、鐵ヲ掘出シテ、タハラニテ吹涌シテ常ノ鐵ニナスヲ云也。是ハ備中ニ鐵ノ多所ナレハキヒノ中山トイフニ枕詞ニ置リ。

『口伝』第四冊望才（注13）

f マカネフクトハクロカネフクラ云。

『古今鈔』第五冊美才（注14）

この「c・d・e・f」も、同様に「a・b」の下で成立している註と見てよい。

以上から「まかね（ふく）」に関する古今伝授の原態は、「a」「b」の

マカネフクト云フハ、土ノ中ナル黒金（＝鉄）ヲ水ニテ揺リ集メテ、タハラト云フ物ニテ、吹キワカス也。

マカネトハ、コガネヲ言ヘド、クロカネヲモ荒金ニ対ヘテ言フベキ歟。

であり、藤原定家より発していたと見てよい。この「まかね」を鉄と見る解は、定家より前にその淵源があるのかどうかであるが、これは能因法師（歿年未詳）に一つの証がある。

g さみだれにとくるまがねをみがきつてる日とみゆるますがみかな

『能因法師集』三九番歌「与州にて詠之、樂府和歌百練鏡」

h まかねだにとくといふなる五月雨になにの岩木のならる君ぞも

『能因法師集』三番歌「夏二首」（注15）

i まかねふくとは、くろかねをふくをいふ。

（京都女子大学図書館蔵吉澤文庫本

『能因歌枕』七丁表七行目（注16）

右によつて、平安期には「鉄」という理解が存したことがわかり、これが古今伝授の世界へ流れ、古今伝授を介して流布し

たと見てよい。

## 五、「まかね」「まかねふく」の原義

『萬葉集』において「まかねふく」は、地名「にふ」に冠する枕詞の形で出ている。

A 麻可祢布久 尔布能麻曾保乃 伊呂尔但豆 伊波奈久能  
未曾 安我古布良久波（14・雲、東歌）

ここに見られる地名「尔布」（丹生は、松田壽男氏の『丹生の研究』（注17）で広く知られるように、水銀を産出する土地に名付けられている地名である。この水銀は黄金を溶かすことの出来る唯一の物質であり（アマルガム合金法による、東大寺大仏等への鍍金過程で知られている。この次第で、「まかね」は黄金である）と理解するのがよい。「黄金を葺き上げる鍍金する尔布」という解となる。しかしながら、近代の『萬葉集』の注釈書でこのように解している書は少ない。以下、その代表的なものを列挙してみる。

鉄説……鴻巣全釈・総釈折口信夫・武田全註釈・窪田評釈・佐佐木評釈・土屋私注・大系本・澤瀉注釈・新潮集成・全注（水島義造・新大系本）

水銀説……井上新考

黄金説……古典全集本・中西全訳注・完訳本・新編全集本・

伊藤釈注

この内、古典全集本・完訳本・新編全集本は同じ流れを汲む

書であるから、単純に三件と数え難いものがある。圧倒的に「鉄」説が多い。『井上新考』は、「マガネは金屬の總稱にてこゝにては水銀ならむ。フクは分析するなり」としている。新しくは堀勝博氏が「まがねふく丹生」とは「自然水銀を滲出した辰砂の鉱床にちなむ表現」としている（注18）。古典全集本は「マガネは金の異名。マは純正の意であろう。フクは、辰砂から採った水銀で雑鉱から純金を吹き分け、精錬すること」とする。『伊藤釈注』は、この「A」歌条ではなくて、次に掲げる「I」歌の「真朱」の条で、永江秀雄氏の論考（注19）を挙げて、「A」歌の「ま金」を純金と見るのが正しいとしている。実は、これらよりずっと早くに、板橋倫行氏がアマルガム鍍金のことを指摘している（注20）。この板橋説に依拠したのが古典全集本の下記「I」歌条であるので、この「まかね」についての古典全集本の黄金とする見解も板橋説によっているものと見てよい。

次の「真朱」（<sup>マ・シ</sup>マ・シ）もそうした水銀成分を含んだ赤土（辰砂）と理解してよく、当時の造仏活動のもとの詠と解釈するのが良い。

j 池田朝臣嗤大神朝臣奥守歌一首（池田朝臣名忘失也）  
寺々之 女餓鬼申久 大神乃 男餓鬼被給而 其子  
将播 （16・元四〇）

（以下の見出し符号においては、k・o・p・sなど、大文字とまぎれやすい符号は省いた。）

l 大神朝臣奥守報嗤歌一首  
佛造 真朱不足者 水淳 池田乃阿曾我 鼻上乎穿

礼<sup>レ</sup>

(16・三四)

m 或云平群朝臣<sup>やへはら</sup>嘯歌<sup>うた</sup>一首  
小兒等<sup>こどもら</sup> 草者<sup>くさもの</sup>勿<sup>な</sup>刈<sup>は</sup> 八穂<sup>やほ</sup>藪<sup>やぶ</sup>乎<sup>や</sup> 穗<sup>ほ</sup>積<sup>つみ</sup>乃<sup>の</sup>阿曾<sup>あそ</sup>我<sup>が</sup> 腋<sup>わき</sup>草<sup>くさ</sup>乎<sup>や</sup>可<sup>か</sup>

(16・三四)

n 穗<sup>ほ</sup>積<sup>つみ</sup>朝臣<sup>あそ</sup>和歌<sup>わが</sup>一首  
何所<sup>いづこ</sup>曾<sup>なほ</sup> 真朱<sup>まゝ</sup>穿<sup>く</sup>岳<sup>たけ</sup> 薦<sup>こたゑ</sup>疊<sup>たま</sup> 平群<sup>へぐり</sup>乃<sup>の</sup>阿曾<sup>あそ</sup>我<sup>が</sup> 鼻<sup>はな</sup>上<sup>うへ</sup>乎<sup>や</sup>穿<sup>く</sup>礼<sup>れ</sup>

(16・三四)

この「佛造真朱」についての古注は彩色説である。「佛ヲアカクサイシクヲ云也」(『萬葉目安』注21)と、室町末期の『目安』に記されているように、以後、江戸期から近代にかけては、彩色の赤い顔料と解されて来た。

この解釈の流れを変えたのが前出の板橋倫行氏説であり、大系本の三八四一番歌の頭注で、

但し硫化水銀のことで、それに金をまぜ、アマルガムとして仏像を鍍金<sup>めい</sup>するのに使うという説もある(板橋倫行氏)。と一説として紹介され、全集本の三八四一番歌の頭注では、

ま朱<sup>ま</sup>・辰砂<sup>しんさ</sup>。硫化水銀の古名。色赤く、その出土地は丹生(美濃)と呼ばれた。これから採った水銀は五対一の割合で金と混ぜ、アマルガムとして鍍金した。『延暦僧録』の記載によると、東大寺の大仏の鍍金には約一九三キログラムの膨大な量の水銀を要したことが知られる。

と全面的に板橋説により、水銀によるアマルガム鍍金説を採るに至った。以後、新潮集成・中西全訳注・完訳本・新編全集本・伊藤釈注と、鍍金説を採っている。これに異を唱えたのが最近

の新大系本(三四番歌条)である。

第二句「ま朱」は、赤土。朱砂。正倉院文書「造仏所作物帳」(天平六年五月一日)には、「朱沙小八両(赤玉料、緑青小十七斤九両(青玉并黒玉料……)とあり、天平勝宝四年(七五三)の「仏像彩色料注文」には「合綵色料十三種」の筆頭に「朱沙二両」が見え、同じく「仏像彩色料并布施等注文」には「朱沙一両 直錢一千文」が「金青一両 直錢七百元」胡粉二両 直錢八十文」「緑青二両 直八十文」などと並んでいる。近年、この「ま朱」を銅像の鍍金に用いる水銀の原料と見る説が行われるが、右の「造仏所作物帳」には「水銀小三斤一分(金藤塗料)」とあり、顔料の「朱沙」と塗料の「水銀」とは区別して掲げられている。天平時代は、脱活乾漆像や塑像の仏像が多く作られた。「ま朱」はその彩色に用いる顔料の中でも高価なものであった。

と、新大系本の脚注にしては長い注記を施している。正倉院文書には「朱沙」と「水銀」とが出て来、「水銀」は原材料名として、「朱沙」は彩色料として出ていることが確認できる。しかしながら、「真朱」が即ち彩色料としての「朱沙」であつて水銀を意味しないとは即断出来ない。純粹な水銀そのものは朱い色を呈しないが、自然界にあつては多く硫化水銀という化合物として存在し、辰砂とか丹砂と呼ばれる赤色土として存在する。それを「真朱」と呼ぶわけであり、歌中の「真朱」が彩色料としての朱沙であつて材料名としての水銀を意味しないとは断言出来ないのである。

ほろけつるまき

ましてこの「I」歌においては、「佛造真朱」とあつて、「仏塗る真朱」とあるわけではない。アマルガム鍍金にあつては、まさに工程としての「造る」の概念に属するものであるが、一旦造形した後の彩色は「造る」ではなくて「塗る」に該当しよう。このように考えると、「I」歌における「真朱」は辰砂であると見てよい。A歌における「麻可祢布久尔布能麻曾保」も辰砂で納得できるものである。

このことは、接頭語「ま」の語義からも、接頭語「片」に対応するものであり、完美的、完きを意味する語であつて、「鉄」よりも「黄金」が該当することになる。

## 六、「まかね」の黄金の事例

また、「黄金」と理解出来る明らかな根拠の例が『日葡辞書』にある。この用例は、『日本国語大辞典』の初版において、その第二項目に「純粹の黄金」として挙げられていた事例である。『日葡辞書』は一六〇三年に本篇が刊行されていて時代はくだるが、そこには次のように、明示されている。

Magane マガネ (真金) 金・黄金; 詩歌語。 (注22)

より遡る用例に『類聚名義抄』の例がある(注23)。この『類聚名義抄』の「釦」字条において、「マカネ」は「釦」字を介して「コガネ」「金」と結び付くが、「鉄」と理解する余地は『名義抄』にはない。「釦」(音口 金飾器 カネ マカネ カ、フ/コガネ ヌリ マトフ) (観智院本『類聚名義抄』僧上二四)。

ただし、『類聚名義抄』の「釦」字条は微妙な事例である。「提出した素稿」では、「純粹の黄金」の事例として『名義抄』(釦金、カネ、マカネ、コガネを挙げ、「第二版」では、「純粹の黄金」条に

\*観智院本名義抄(註)「釦 カネ マカネ カカフ コガネ」として採られた。観智院本『類聚名義抄』(僧上二四)には、

r  
釦  
コガネ  
飾器  
カネ  
マカネ  
カ  
フ  
コガネ  
ヌリ  
マトフ

とあり、これは、

釦 (音口 金 飾器 カネ マカネ カ、フ/コガネ ヌリ マトフ)

と翻字できる。しかしながら、蓮成院本『類聚名義抄』(第三冊 下。三才)には、

t  
釦  
コガネ  
飾器  
カネ  
マカネ  
カ  
フ  
コガネ  
ヌリ  
マトフ

とあり、これは、

釦 (音口 金飾器 カネ/マカネ カ、フ/コガネ ヌリ ヤトイ)

と翻字できる(「コガネ」の二文字目は虫損のために、その第二音節の清濁は不確か。「釦」とは「金飾器」であり、「こがね塗り」即ち金鍍金した器物を言う。よつて蓮成院本に「ヤトイ」とあるのは観智院本の「マヤシトフ」が良く、金で飾ることを「繼ふ」としたものであろう。「カ、フ」の語は、恐らく「かがふ」で、

「かがふる」(今行四段の再活用しない前の語形ではなからうか。即ち「被ふ」という八行四段の語形が推定でき、ものを覆う意ではないかと考えられる。或いは「マカネカ、フ」という一語であるとする)、「マカネ」は黄金の意と認定でき、その真金で鍍金することになるのであろうか。

右の『類聚名義抄』の事例よりも明確な例として、「四、古今伝授とその淵源」の条で挙げた諸資料が黄金であることを雄弁に語っている。即ち「Y」「a」の事例がそれである。

黄金。真金トカケルハ皆コカネ也。サレトモ是ハホルム詞也。クロカネニテアル歟。『古今和歌集注抄出』Y

マカネフクト云ハ土ノ中ナルクロ金ヲ水ニテユリアツメテタ、ラト云物ニテ吹ワカス也。マカネトハコカネライヘトクロカネヲモアラカネニ對ティフヘキ歟。

『古今集開書(六卷抄)』下冊(三才) a

このように「古今伝授」において「鉄」説を發した張本人は、元來は「真金」というのは黄金を意味するものであると知っていたのである。よって契沖の『古今餘材抄』(用例「V」)においても、

今案真金は金をいふと知なから、くろかねと尺せられたるは、吉備の中山は鉄を出す所なりける歟。金をもととして、くろかねをもまがねといは、白かねあか、ね、惣してあらかねにむかへてふけるかねをはいづれをも申へきなり。

と、契沖は『顕註密勘』に基いて、戸惑いながら言及したのであった。

私は「提出した素稿」において、右の『六卷抄』の例を「純粹の黄金」の事例として引いたが、これが採りあげられなかったのは残念なことであった。

## 七、鉄の意味が定着した理由

それでは「まかね」にどういう経緯で「鉄」という意味が定着して行ったのであろうか。『古今和歌集』(巻20・二〇八番歌)の「まかね」の歌を前出の高野切の例(K)で示そう。

まかねふくきひのなかやまおひにせるほそたにかはのおとのさやけさ

このうたは承和のおほむへのきひのくにのうた

ここに、「承和の御嘗の吉備国の歌」と詞に書かれている。正史によつて検証すると、

卜定大嘗會事。以近江國高嶋郡爲悠紀。備中國下道郡爲主基。『続日本後紀』卷一、天長十年(八三三)三月己酉(22日)条爲行大嘗會事。『続日本後紀』卷一、同年十一月庚申(8日)条御樂樂院。終日宴樂。悠紀主基共立標。…下略…

『続日本後紀』卷一、同年同月戊辰(16日)条

とある。この天長の翌年が「承和元年」となり、仁明天皇は承和の十四年間を中心とした天皇であつた(没年は嘉祥三年(八五〇))。この『古今和歌集』の歌は『催馬楽』に採録されたことで(三番、より知られることとなつた『古今和歌六帖』にも黒主の歌として収録。二七八番歌)。しかしながらこの『古今和歌集』の歌は、

現地に根付いた古歌ではなくて、大嘗会のために萬葉歌を改作して作られてゐることは広く指摘されてゐる。

大王之 御笠山之 帶爾為流 細谷川之 音乃清也

〔萬葉集〕卷七・二二〇(番歌)

この萬葉歌の上二句を「真金ふく吉備の中山」と吉備国に置き換えて作られた歌であつた。さて、この『古今和歌集』の歌に見られる「真金ふく吉備の中山」の「まかね」にどういふ経緯で「鉄」という理解が定着したのであろうか。

それは、はからずも契沖の『古今餘材抄』(用例「V」)において、

今案真金は金をいふと知なから、くろかねと尺せられたるは、吉備の中山は鉄を出す所なりける歟。

と疑問の形で言及しており、古今伝授の『口伝』(用例「e」)において、

是ハ備中ニ鐵ノ多所ナレハキヒノ中山トイフニ枕詞ニ置リとしてゐるので理解できる。このことは『岡山県の地名』(注24)において、

鉄に関しては、現時点では最古の製鉄遺跡として六世紀末―七世紀初めの大蔵池遺跡(久米郡久米町)しか検出されていないが、五世紀代に造営された月の輪古墳(同郡榑原町)から鉄滓が出土しており、製鉄の歴史はさらにさかのぼるものと考えてよい。

(吉備)条総論、二七―二八頁

と言及している。この久米郡は当初は備前国に属したが、和銅六年(七二三)の美作国建国時に同国に属することとなつた。ま

た「吉備の中山」は、

かつての備前と備中の国境にある独立した丘陵。…中略…

東麓に備前一宮の吉備津彦神社、西麓に備中一宮の吉備津神社が鎮座する。

(前出『岡山県の地名』六〇七頁)

という位置関係にあり、久米郡はその北方に位置していて、旭川が南北に流れ、その下流域(西方)に「吉備の中山」が存する。恐らく、水運によつて鉄が運ばれたところから、そのような鉄説が出たものであろうと推測される。このことは、

約一六〇メートルの前方後円墳で豊富な鉄製品と各種の形象埴輪をもつ金蔵山古墳、…中略…、同規模で(約一五〇メートル)で豊富な鉄器を副葬する前方後円墳の神宮寺山古墳(以上岡山市)、…下略…

〔岡山県の地名』三七頁)

とある記述で裏付けられる。金蔵山古墳は旭川下流の東側、神宮寺山古墳は旭川下流の西側に位置している(注25)。また、川越哲志氏の「鉄清算と土器製塩」(注26)では、周辺地域における鍛冶工房を含む製鉄遺跡の報告がある。

『延喜式』で検証して見ると、卷二十四の「主計式上」に、美作国(52)……「調」規程の末尾に「自餘輪絹鉄」、

「備前国(53)……「調」規程の末尾に「自餘輪綿米」。

「備中国(54)……「調」規程の末尾に「自餘輪絹鉄」、

「備後国(55)……「調」規程の末尾に「自餘輪絹鉄」、

「備前国(53)……「調」規程の末尾に「自餘輪絹綿米」、

「備中国(54)……「調」規程の末尾に「自餘輪絹鉄」、

「備後国(55)……「調」規程の末尾に「自餘輪絹鉄」、

### 「庸」規程の末尾に「自餘輸米鹽鐵鐵」。

とあり、備前国以外は、備中とその周辺国の特産として、鉄製品品の「鉄」と「鉄」そのものが挙げられていて、鉄が備中国の特産品であつたことが知られる。また、卷二十六の「主税式上」を見ると、「鑄銭年料」(95)条に、長門国・豊前国と共に、「銅鉞」として「備中国銅八百斤」が録されていることが注意される。潮見浩氏は「鉄・鉄器の生産」(注27)において、前記した諸遺跡について論究した後に、その鉄の貢進について、飛鳥・藤原・平城の木簡類を整理して、

七世紀代では、播磨(讃岐郡)・備中(窪屋郡)の二<sup>二</sup>国がある。…中略… ついで八世紀前半では、さきの二国(備中の場合は賀陽郡があらたに出てくる)にくわえて美作(英多郡・勝田郡・大庭郡・真嶺郡)・備前(赤坂郡)・備後(三谿郡・三上郡)があらたに登場する。

古代の製鉄は、官採の鉄山は存在はするが、鉄・鉄の貢進からみると、国家の必要とした鉄の大部分は私採に依存した。(二五八頁)

と指摘している。

以上の次第で、「吉備のまかね」に関して、鉄とする説が出て来たものであると理解できる。

### 八、枕詞「まかねふく吉備」について

最後に、枕詞「まかねふく」の被枕について見ておきたい。

枕詞「まかねふく」が「にふ」(丹生)に冠することについては先に記しているので(五、「まかね」「まかねふく」の原義)、ここでは、その被枕「吉備」との関係について考察する。

枕詞「まかねふく」はどういう由来で「吉備の中山」ないしは「吉備」に冠することになったのであろうか。日本の古代遺跡23『岡山』(注28)の「吉備中山の周辺」(二四二—二四九頁)を見ても黄金は勿論のこと、鉄すらも産出した形跡がない。より広い範囲で見ると、前記したように、鍛冶工房や製鉄遺跡は確認できる。しかし「吉備の中山」という独立丘陵に冠する枕詞としての「まかねふく」は、その産物という点では理解しかねるものである。

よつて「まかねふく」という枕詞は「吉備の中山」に冠するのではなくて、「吉備」に冠する枕詞と考えるのがよい。見て来たところによると、「吉備」(備前・備中・備後)は鉄を加工して産出していたことが確認できるが、「まかね」の原義は黄金と解するのがよく、枕詞としての「まかねふく」という「まかね」の意味も黄金と考えられるであらう。しかし、「吉備」地域から黄金を産出したという記録も遺跡もない。上代における黄金の産出は、左記の通り、陸奥國少田郡の「小田なる山」があるのみである。

・此大倭國者天地開闢以來<sup>ル</sup>黄金<sup>ノ</sup>人國<sup>ノ</sup>獻言<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>毛斯地者無物<sup>止</sup>念<sup>ニ</sup>聞看食國中<sup>ニ</sup>東方陸奥國守從五位上百濟王敬福<sup>部内少田郡</sup>黄金出<sup>在奏</sup>獻。

(統紀「宣命」第十二詔。天平勝寶元年(七四九)四月一日条)

・陸奥國、始貢黄金。

『続日本紀』同年二月二十二日条

・美知能久乃小田在山

『萬葉』18・四〇九四番歌。同題詞「陸奥國」

こうした情況は平安初期においても変わりがないようである。とすると、これは言語遊戲に基づいた枕詞(注29)であると考へる他はなからう。即ち、「まかねふく」は、その色の類似から、「黍(きみ・きび)」に冠する意で「吉備」へと続けたものに違いない。穀物としての黍は黄金色を呈する。古く「寸三」(萬葉)16・三八三四番歌)の語形をとり、「キ甲類+ミ甲類」であるが、mb音の交替から、キビ(キヒ)の語形も『倭名類聚抄』(十巻本、「丹黍 阿賀岐々比」「秬黍・黒黍 久呂岐比」「稷米 岐比乃毛知」巻九、八・十丁)や『類聚名義抄』(「黍」法下一九、「黍」法下二七)で確認できる。ミ甲類の音交替であるから、「キ甲類+ビ甲類」となる。一方、地名「吉備」の上代特殊仮名遣いは「キ甲類+ビ乙類」であるが、掛詞の類は類音間で確認出来るから、枕詞の被冠も甲乙類を越えることが許容されよう。その上に、この「吉備」に冠する用例は上代例ではなくて、『古今和歌集』の時代のことであるから、全く問題がないと理解してよい。

## 九、おわりに

『播磨國風土記』(国宝三條西家本、天理図書館蔵)に、次の例がある。

多良知志 吉備鐵 狭鉞持 如田打 手拍子等 吾將爲儼

(美濃郡志深里条)

日本古典文学大系本『古代歌謡集』(担当、土橋寛氏)の「風土記歌謡」は、この歌謡を収載していないが、木本通房氏の『上代歌謡詳解』(注30)は取り上げて次のように訓んでいる。

たちちし吉備のまがねのさ鉞もち田打つが如く手打て子等、吾はた舞せむ

第五句の訓みは、新編日本古典文学全集本『風土記』(注31)の次の訓みが良いだろう。

たちちし 吉備の鉄の 狭鉞持ち 田打つ如す 手拍て子等 吾は儼爲む

しかし、この第二句の「吉備鉄(鐵)」は右の考察結果から、「吉備くろかねの」と訓むのが良い。即ち、この風土記歌謡は、たちちし 吉備鉄の さ鉞持ち 田打つが如く 手拍て子等 吾は儼爲むと訓むのがよいことになる。

## 【注】

1 『日本国語大辞典』初版第十八巻(小学館、一九七五年一月)。該当項目は以下のように記述されている。

まがね【真金・真鉄】(名) ① (古くは「まかね」鉄。くろがね。

\*能因集下「さみだれにとくるまかねをみがきつてるひと見ゆるます鏡かな」\*俳諧・新花摘「いろ黒く真かねをのべたるやうに、たたけばくわんくわんと音す」\*妻木(松瀬青々)夏「霍乱や鉄(マ



## 2

カネ)の杵を枕にす」②(真金) 純粹の黄金。純金。しんきん。  
 \*日葡辞書「Magane (マガネ) 鉄。黄金。歌語」  
 まかねふく「真金吹」曰 囀(真金)は鉄。「吹く」は、製鍊の際、  
 蹈躑(たたら)とよばれる大きなふいごで空気を吹くことで、鉄を  
 製する意) ①「丹生(にふ)」にかかろ。「丹生」は砂鉄などを  
 含む赤土。\*万葉・一四・三五六〇「麻可禰布久(マカネフク) 丹  
 生(にふ)の真朱(まそほ)の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふら  
 くは(東歌)」②地名「吉備」にかかる。吉備が鉄の産地である  
 ため。\*古今・神あそびの歌・一〇八二「まかねふく吉備の中山帯  
 にせる細谷川の音のさやけさ(よみ人しらす)」 曰 雅楽の曲名。  
 催馬楽(さいばら)、呂の歌の中にあつたが曲は絶えた。「案家録」  
 六・催馬楽歌字」に「まかねふくきびのなかやまおびにせる」の歌  
 い出して所収。

提出した素稿(一九九七年七月、提出)。

まかね「真金・真鉄」《名》①(真金、古くは「まかね」)純粹の黄金。純金。しんきん。……以下、前掲により略……。②鉄。くろが  
 ね。\*能因集下「さみだれにとくるまかねをみがきつてるひと  
 見ゆるます鏡かな」\*能因歌枕「まかねふくとはくろかねをふくを  
 いふ」\*古今秘聴抄「まかねふくくろかねをいふ」\*俳諧・新花  
 摘「いろ黒く真かねをのべたるやうに、たたけばくわんくわんと音  
 す」\*妻木(松瀬青々)夏「霍乱や鉄(マカネ)の杵を枕にす」  
 【語註】……前掲により略……。

まかねふく「真金葺く」曰 囀(真金)は黄金。「葺く」は、鍍金す  
 ること。水銀によるアマルガム法で鍍金したことから出てきた枕

## 3

詞) ①……前掲により略……。\*万葉・一四・三五六〇「麻可禰布久  
 (マカネフク) 丹生(にふ)の真朱(まそほ)の色に出て言はなく  
 のみそ吾が恋ふらくは(東歌)」②地名「吉備」にかかる。……前  
 掲により略……。\*古今・神あそびの歌・一〇八二「まかねふく吉備  
 の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ(よみ人しらす)」 曰 雅楽  
 の曲名。催馬楽(さいばら)、呂の歌の中にあつたが曲は絶えた。「案  
 家録六・催馬楽歌字」に「まかねふくきびのなかやまおびにせる」  
 の歌い出して所収。

該当項目は以下のように記述されている。

まかね「真金・真鉄」《名》(古くは「まかね」)①(真金) 純粹の  
 黄金。純金。しんきん。\*観智院本名義抄(1241)「釦 カネ マ  
 カネ カカフ ユガネ」\*日葡辞書(1603-04)「Magane(マガネ)《歌》  
 黄金。歌語」②鉄。くろがね。\*能因集(105頃)下「さみだれ  
 にとくるまかねをみがきつてるひと見ゆるます鏡かな」\*俳諧・  
 新花摘(1788)「いろ黒く真かねをのべたるやうに、たたけばくわ  
 んくわんと音す」\*妻木(松瀬青々)夏「霍乱や鉄(マ  
 カネ)の杵を枕にす」 【語註】……前掲により略……。

まかねふく「真金葺・真金吹」曰 囀(真金)は黄金。「葺(ふ)  
 く」は、鍍金(めっき)する意)①「丹生(にふ)」にかかろ。「丹」  
 は辰砂(硫化水銀)を含む岩や水銀そのものをいい、その岩を産す  
 る地名を「丹生」という。\*万葉(8C後)一四・三五六〇「麻可  
 禰布久(マカネフク) 丹生(にふ)の真朱(まそほ)の色に出て言  
 はなくのみそ吾が恋ふらくは(東歌)」②地名「吉備」にかかる。

- かり方方の詳細は不明。↓補注。\*古今(935-974) 神あそびの歌。  
 一〇八二「まかねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ  
 (よみ人しらず)」 曰雅楽の曲名。催馬楽(さいばら)、呂の歌の  
 中であつたが曲は絶えた。「衆家録六・催馬楽歌字」に「まかねふ  
 くきびのなかやまおびにせる」の歌い出しで所収。補注(目②に  
 ついて)「まかね」は黄金の意で、讃詞か。または、黄金色のキビ  
 (黍) から、「吉備」にかかるか。↓「まがね(真金)」の語誌。…  
 下略。
- 4 日本名跡叢刊『高野切古今集(第一種)』(二五社、一九七九年二月)。
  - 5 中央大学本『顯註密勘』(日本古典文学影印叢刊22、日本古典文学会  
刊、一九八七年九月)による。
  - 6 『曼殊院蔵古今伝授資料』第一卷(汲古書院、一九九〇年二月)。  
 以下の諸巻で、この叢書の「解題」(全て浅見緑氏担当)を参照した。
  - 7 東京大学国語研究室資料叢書 第九巻『古今和歌集注抄出』(汲古書  
院、一九八五年九月)。「解題」は久保田淳氏による。
  - 8 『曼殊院蔵古今伝授資料』第二卷(汲古書院、一九九一年二月)。
  - 9 『曼殊院蔵古今伝授資料』第三卷(汲古書院、一九九一年四月)。
  - 10 ノートルダム清心女子大学古典叢書『古今和歌集開書』(福武書店、  
一九七八年九月)。「解題」は赤羽淑氏による。
  - 11 『曼殊院蔵古今伝授資料』第五卷(汲古書院、一九九一年二月)。  
 『古今集開書』は延徳三年(四九)に宗祇から講釈を受けた開書の写し。
  - 12 『曼殊院蔵古今伝授資料』第六卷(汲古書院、一九九二年二月)。「難  
波津泰誼抄」も延徳三年(四九)に宗祇から講釈を受けた開書の写し。
  - 13 『曼殊院蔵古今伝授資料』第七巻(汲古書院、一九九二年六月)。「口  
 伝」は享禄二年(一五九)から三年(一五〇)に行われた講釈の開書。  
 14 『曼殊院蔵古今伝授資料』第四卷(汲古書院、一九九一年八月)。「古  
 今鈔」は、寛永四年(一六二七)写の冷泉家流の注釈書。  
 15 「g」「h」の『能因法師集』は『新編国歌大観』第三卷(角川書店、  
 一九八五年五月)による。  
 16 当書の翻刻に川村晃生氏・能因歌枕研究会編「校本『能因歌枕』」(『三  
 田國文』第五号、一九八六年六月)がある。当稿は原本複写に拠った。  
 17 松田壽男氏『丹生の研究——歴史地理学から見た日本の水銀——』(早  
 稲田大学出版部、一九七〇年十一月)。  
 18 堀勝博氏「まがねふく丹生のまをほ」について『「解釈」四八五集、  
 一九九五年八月。なお、次の注19の永江論考、参照。  
 19 永江秀雄氏「地名「丹生」と歌語「真金」(日本地名研究所紀要、第  
 一号「地名と風土」一九九四年三月)。伊藤博氏『萬葉集釈注』に引用  
 されたこの永江論考については、三重大学附属図書館を通じてコピー入  
 手を依頼していたが、他の図書館での所蔵が確認出来ないばかりでなく、  
 実在すら明確でなかった。それはWebcat Japan 総合目録データベースで、  
 当初一九八四年として登録されていたことにもよる。本件は、三重大学  
 附属図書館司書の方の涙ぐましい努力の結果、当稿を印刷所へ提出後、  
 校正までの間に、永江論考を入手することが出来、この末二頁を差し替  
 える形で原稿を修訂出来ることとなった(司書壽田様に感謝申し上げる。  
 永江論考と当稿と一部重複する箇所があることをここにお断りし、「ま  
 かね」の黄金説について、有益な先蹤論考があることをお断りしておく。  
 20 板橋倫行氏「大仏造営と万葉集」『双魚』第三冊、一九五一年二月、  
 同氏『万葉集の詩と真実』及び『板橋倫行評論集』第一巻、所収。

21 『萬葉學叢刊 中世篇』(萬葉集叢書第十輯、古今書院、一九二八年二月)。筆者、未詳。

22 土井忠生氏・森田武氏・長南実氏編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、一九八〇年五月)。

23 気になる事例として、『往生要集』について言及しておきたい。この例は、漢文脈中の事例であり、微妙な用例ではある。

彼土衆生。其身眞金色。内外俱清淨。常有光明。彼此互照。三十二相。具足莊嚴。端正殊妙。世間無比。

(卷上、大文第二「欣求淨土」の第二「身相神通樂」条)  
彼の土の衆生は、其の身眞金色にして、内外俱に清淨なり。常に光明有つて、彼此互に照す。三十二の相あつて、莊嚴を具足し、端正殊妙にして、世間に比ぶるもの無し。

(花山信勝氏『原本校註漢和対照 往生要集』山喜房佛書林刊、一九三七年七月。七五頁)

『往生要集』は源信によつて寛和元年(九八五)に成つた書である。漢文で書かれており、日本思想大系本は「真金色」に「しんこんじき」とルビ訓を付している(『源信』岩波書店、一九七〇年九月)。漢文体であるから確かにそのように読むことが出来、「真」は「真正」の「真」であるが、日本人である源信によつて書かれたものであり、執筆に際して源信は「まかね」を念頭に置いていたのではなからうか(追記・注19の永江論考参照)。「三十二相」は、佛足石歌碑歌の二番歌に「弥禰知阿麻利布多都乃加多知(三十あまり二つの相)とあり『大般涅槃經』には頻出する。

言諸衆生皆有佛性。衆生聞已即便命終生人天中。當爾之時畜生亦盡除謗正法。是一一花各有一佛。圓光一尋金色晃曜。微妙端嚴最上無

比。三十二相八十種好莊嚴其身。

(卷十一。『大正藏』十二卷、四三〇頁上) 至於佛所。仰瞻如來三十二相八十種好。猶如微妙眞金之山。

(卷二十。『大正藏』十二卷、四八二頁下)

この「三十二相」の一つに「身金色相」があり、仏像は全身を金で莊嚴されることになり、「釋迦如來金口正說」(『萬葉集』卷五、八〇二〜八〇三番歌「思子等歌一首」の序冒頭)となる。

24 日本歴史地名大系34『岡山県の地名』(平凡社、一九八八年四月)。

25 角川日本地名大辞典33『岡山県』(角川書店、一九八九年七月)の「古墳時代主要遺跡分布図」(二七七四頁)を参照した。また間壁忠彦氏・間壁葎子氏共著『岡山』日本の古代遺跡23(保育社、一九八五年九月)の「遺跡地図2」(三四〜三五頁)及び同書の岡古墳についての記述(七四〜八三頁、同カラーグラビア(二八〜一九頁)が参考になる。

26 川越哲志氏『鉄清算と土器製造』(新版「古代の日本」④『中国・四国』角川書店、一九九二年一月)。

27 潮見浩氏『鉄・鉄器の生産』(岩波講座『日本考古学』3、一九八六年三月)。

28 注25に示した日本の古代遺跡23『岡山』による。

29 廣岡義隆「言語遊戲としての枕詞」(大養孝博士米寿記念論集『萬葉の風土・文学』塙書房、一九九五年六月)。

30 木本通房氏『上代歌謡詳解』(武蔵野書院、一九四二年八月)。

31 植垣節也氏『風土記』(新編日本古典文学全集 小学館、一九九七年一〇月)。

〔ひろおか よしたか 本学教員〕